

研究所ニュース No.59

# リベらしおん

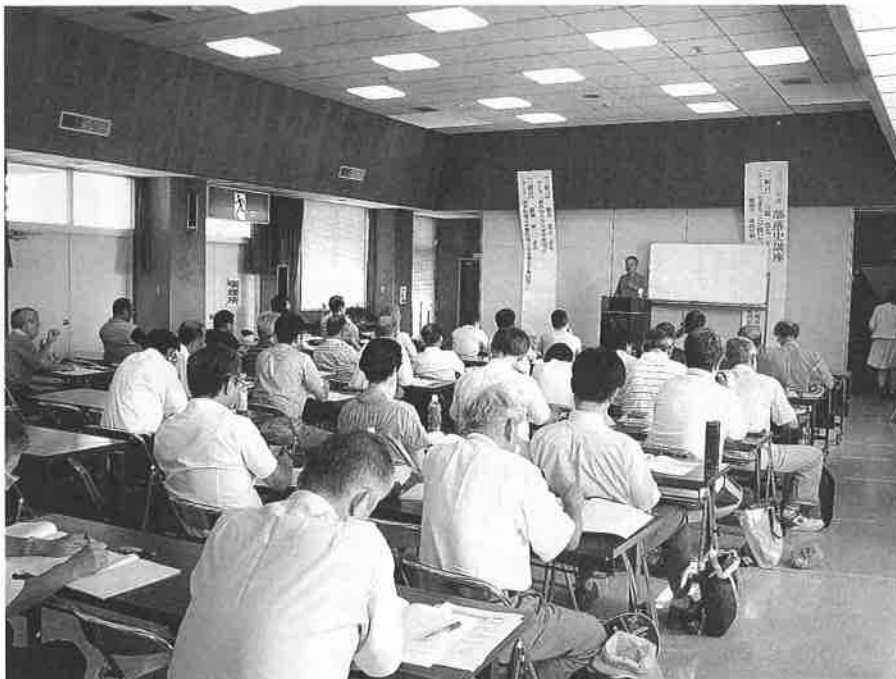


「リベらしおん」は、フランス語で「解放」という意味です。

発行：公益社団法人 福岡県人権研究所

〒812-0046 福岡市博多区吉塚本町13-50 福岡県吉塚合同庁舎内 TEL 092-645-0388 FAX 092-645-0387

Mail: info@f-jinken.com URL: http://www.f-jinken.com/



会場風景（正面は廣畑研二さん）

## 二〇一三年度 部落史講座を開催

〈講座一〉石瀧豊美さん

〈講座二〉駒井忠之さん

〈講座三〉廣畑研二さん

二〇一三年八月一〇日（土）

福岡県部落解放センター

昨年に引き続き、当研究所主催の「部落史講座」が八月十日（土）、福岡県部落解放センターで行われ、約五〇名の参加者があった。

午前十時、森山沾一理事長による開会挨拶のあと、講座一では、石瀧豊美さん（イシタキ人権学研究所所長・福岡県人権研究所理事）が、「生きることが闘いだ！ 水平社以前・黎明期の解放運動―解放令、筑前竹槍一揆、復権同盟、九州平民会、鎮西公明会―」と題して講演。一三時からの講座二では、駒井忠之さん（水平社博物館学芸員）が、「海外から見た水平社宣言」、講座三では、廣畑研二さん（『水平の行者 栗須七郎』著者）が、「水平社創立の舞台裏―日本社会主義同盟―」というテーマで話された。

県内外から集った参加者たちは、メモをとりながら熱心に講演に聞き入っていた。

講座の内容については、来年三月末発行の『リベラシオン』一五三号に掲載する予定です。

以下、参加者の感想を紹介します。

○石瀧豊美さんの講座について

「固定観念にとらわれた史観でなく、時代に即した歴史解釈に共感。それであってこそ歴史の連続性、人間の進歩も理解できる、特に解放令の評価は改めて考えさせられた」「時代時代の出来事は、その時の社会状況、ものごとの価値観、考え方に基いて理解してやることの大切さを再認識した。子ども達に、江戸時代の中で生活してみるとどうなるかとシミュレーションしてみたい」「おおざっぱな自分の歴史認識の細かい所が満たされた」「歴史を学ぶ時一点だけを見るのではなく、前後周囲の幅を持って見る必要があるというのはそのとおりに思う」



石瀧豊美さん



駒井忠之さん

「新たな視点で興味深かった」

○廣畑研二さんの講座について

「徳永参二(テキヤ屋)の生き様が興味深かった。栗須七郎ら水平社裏面史の群像にも、もつと光を当ててほしい」と痛感。「水平社創立に関わって名が知られていない人たちの動きも当然のことながらあったんですね。時代の出来事を読み解く時、こういった人たちが、裏舞台にいたことを想像しておかないといけないということに認識した」「社会主義同盟の中に水平社結成に尽力した人がいたことを初めて知った」「あまりに詳しい研究成果に基づく講演に感激した」「日本社会主義同盟の組織がこれまでバラバラにあった知識を一つなげてくれたように思った」



廣畑研二さん

部会活動・研究集会の報告

- 啓発部会(六月二二日)：「啓発担当者のつどい」について打合せ。
- 九州地区部落解放史研究集会(七月二七日)：会員の竹永茂美さんが報告。
- 教育部会(六月二二日、七月二七日)：全同教「四認識論」と福岡の実践などについて議論。
- 部落史研究部会(八月一七日)：今年度の活動内容を検討。
- 外国人部会(八月一七日)：海外人権スタディツアーの学習会を兼ねて、北九州市立大学の稲月正さん(部会員)が韓国の外国人施策について報告。

部落解放同盟福岡県連合会

第六四回定期大会開催

部落解放同盟福岡県連合会第六四回定期大会が、七月二五日(木)に福岡市中央市民センターで開催され、約六〇〇人が集った。最初に全員で「解放歌」を斉唱、開会宣言のあと、組坂繁之委員長から、全九州水平社創立九〇周年にあたり、新たな気持ちで運動に取り組む決意が述べられた。続いて松岡徹中央本部書記長は、住民票、戸籍抄・謄本不正取得の実態や人権侵害救済法などにふれ、小川洋福岡県知事からは「部落差別をはじめあらゆる差別の撤廃に向けて、今後も職員研修や県民啓発を行っていく」と挨拶があった。

会員の声

○原発事故は収束？

―フクシマ現地報告―

松本 京子

七月十一日と十二日福島に行ってきました。東京電力福島第一原子力発電所に近い南相馬市と、そこから福島市までの往復の途中、見てきたこと聞いてきたことを報告します。

南相馬市から福島市の間には阿武隈山地が横たわっています。太平洋側の南相馬市から福島市に向けてしばらく車を走らせると、やがて山林に入っていきます。ここが飯舘村だと同行の方に教えられました。緑の豊かな美しい所です。福島第一原発から三〇キロも離れているにもかかわらず、六二〇〇人の村民は未だ村外避難中です。メルトダウン後の風向きのせいで放射能は、風に乗って遠くまで飛び、雪となって降り注いで福島の内陸部や百キロ先の会津地方まで放射線量の高い地域が広がっています。

福島市から南相馬市に戻る時の夜の景色は、一変しました。道路脇の街灯と所々にある自動販売機の灯りが見えるだけです。昼間見えただ家々に灯りがともっていないので、村があ

ることすら分かりません。そこには夜の団欒の灯り一つない無人の暗闇があるだけでした。常緑樹の葉は年々新しい葉に替わり、古い葉は根元に落ちて堆肥として木の栄養になる。こうして山は豊かになってきましたが、一旦放射能汚染された木々を、それも全て除染するには膨大な費用と時間がかかるので、「不可能」です。だから放射能は蓄積され続けます。除染作業が行われても、除染された物質の入った黒い袋が「除染場所」に放置されているとのことでした。汚染物質をその場においておくことは除染の意味をなさないので、持って行き場がないためです。放射能汚染物質は元の場に放棄されたまま。これでは除染しても、除染できなくてもおなじこと、危険は去りません。不安と不信だけが残ります。「避難指示解除準備区域」を車で回りました。南相馬市南部の津波に襲われ、かつ放射線量の高い地域です。潰れた家、崩れかかっている家、窓や戸が流されて柱や壁だけの家、田んぼに放置されたままの車、瓦礫などなど、二〇一一年三月十一日のままでした。岩手県、宮城県、津波被災地域では、瓦礫撤去等の復興作業は行なわれており、津波の襲った傷跡はある程度整備されています。二年以上が過ぎていくのに、津波の襲ったそのままだ。ここもまた人の気配のない、レイチェル・カーソンの『沈黙の春』の世界です。

南相馬市の人口は、現在約五万人に減少しています。行政はさまざまな手段を使って人々の帰還を促していますが、今なお一万五千人あまりが県外に避難したままです。家族の分裂、二重生活の経済的困難など諸問題の数々。「避難しない」という選択をして残っている人々は、子どもの健康を大変気遣っています。まず子どもたちは外で遊ぶことができません。食べ物、飲料水は勿論大問題で、食材を遠い産地のものにする、水道水は飲ませない等神経を使っています。子どもが鼻から、皮膚からとりこむ汚染された空気、内部被ばくも外部被ばくも同様に心配の種です。心痛ばかりでなく経済的な負担も大変なものだといえます。立ち入りが禁止された「警戒区域」、国が住民に避難するように求めた「計画的避難区域」、それに「緊急時避難準備区域」は、現在新たに「帰還困難地域」「居住制限区域」「避難指示解除準備区域」に再編成されました。「避難指示解除準備区域」では、現在年間二〇ミリシーベルト未満で帰還準備が進められています。チェルノブイリでは、年間五ミリシーベルト以上は強制移住対象地域です。本当に安全なのでしょうか。行政が安全と言っても不安を抱く人々と、放射能についてそれほど気にしない人々の関係のきしみ。親しい友人でも原発事故について、日常生活についてこれまでのように気軽に

に話が出来ない。同じ被害者でありながら被災地に住む派対住まない派、食べ物や飲料水を気にする派対「無頓着」派、原発反対派対原発仕方がない派等々、さまざまな対立が生じています。異なる選択をしなければならなかった故の対立と分裂のひろがり。そのような中での収束宣言と帰還準備です。

政府やマスコミは、放射能汚染は収束した、原発は安全であると、被災者を含めて私たち国民に信じさせようとしています。九州には原発が六機あります。フクシマの収束を信じることは、将来九州にも放射能汚染と私たちの間に不安と焦燥、対立と分裂がもたらされることだ、と思いました。

○映画「セデック・バレ」と

台湾人権スタディツアー

吉瀬 靖子

一八九五年から一九四五年まで、五〇年間にわたる台湾の日本統治時代。統治下の台湾では植民地政策による近代化が推し進められ、新しい文化・文明がもたらされる一方、原住民族独自の文化や習慣がないがしろにされたり、一部では過酷な労働と服従を強いられたりするようになっていた。そんな中の一九三〇年十月二十七日に、日本人警察官との間で起こった小さないざこざ

が原因で発生した原住民による武装蜂起、日本統治時代後期の最大の抗日闘争が「霧社事件」である。

二〇〇九年二月、福岡県人権研究所主催の台湾人権スタディツアーで、霧社に行き、被害者の子孫の邱（タクン）さんにお話を聞いた。霧社事件がおきた公学校跡の跡や抗日起義記念碑、蜂起のリーダーであるモーナ・ルダオの像などを見学した。

その年の末に、台湾映画である「海角七号」というウェイ・ダージョン監督の映画を観に行った。映画のホームページを見ていたときに、ウェイ監督が「霧社事件」を描いた映画を撮影しているを知った。「霧社事件」を映像で見たいと思い、日本で公開されるのを心待ちにしていた。

この映画「セデック・バレ」は、「文化」と「信仰」の衝突という視点で「霧社事件」を描いた四時間三六分という長時間の映画だ。第一部「太陽旗」では、日本の統治下で苦しい生活を強いられてきたセデック族の人々が、部族の誇りをかけ、武装蜂起するまでが描かれている。



第二部「虹の橋」では、蜂起したセデック族に対する日本の警察および日本軍の報復、セデック族の

人々を襲う悲劇と多大な犠牲が、憎しみや恨み、家族愛、苦悩、葛藤などさまざまな感情の交錯を交えながら、生々しく描かれている。

映画が始まってまもなく、イノシシ狩りの様子が描かれていたのははじめ、真の兵士になるため狩り場を争う中で、戦った相手二人の首を狩るシーンなど、セデック族の狩猟民族としての様子が描かれていた。日本統治下、原住民は、蛮人として扱われながら、日本人として生きるように教育されていた。

そんな中、モーナ・ルダオを中心に、セデック族の若者たちが武装蜂起し、公学校で開催される運動会の日、そこに集まっている日本人を襲った。スタディツアーで訪問した公学校跡で日本人が襲われたことを聞き、その当時の写真はみている。しかし、多くの人が殺される映像を観たとき、彼らの日本に対する憎しみを強く感じた。あの銅像になっていたモーナ・ルダオが、自分たちの尊厳を守るために闘ったことや彼の生き様を感じることができた。人権スタディツアーで霧社を訪れたときに見た山桜（日本の桜より赤い）が映画の中で、とても印象的だった。

福岡上映は終了したが、佐賀のシアターシエマで八月二四日から上映されるようだ。

○現場の課題意識を同研活動に！

中島 弘陽

ゴールデンウィークも終わった五月九日木曜日一八時三〇分。北九州市同和教育研究協議会の事務局員と研究部員が小倉中央集会所の大会議室に集まってくる。学級開きから一ヶ月あまり。まずは、互いの近況報告やなんかで話がもろあがる。だいたいの人の近況報告がおわたったのを見はからって、研究部担当者から「それでは、今年の研究大会の内容どうしようか」という声。その声で今年も研究大会の内容づくりがスタートする。

「今年はいじめ」の問題ははずせんやろ」「子どもは貧困やら若い者の生きづらさやらも考えんとなあ」「統発する差別事件のこと考えると人権・部落問題学習も気合入れんといかん」「職場で世代交代が進んでいる、入門講座や基礎講座のようなものも入れんとなあ」などの意見がどんどん出てくる。

毎週木曜日、職場の仕事を少し早めに切り上げて、集まってくる北九州市同教の仲間たち。この人たちが行政支援があるわけではない。また学校からの特別の配慮があるわけでもない。ただあるのは、この人たちの子どもや教育に対する熱い思いだけ。目の前の子どものことをどうかしたい、学校をどうかしたい、家庭や地域に人権文化を根付かせたい。そういう思いだけである。

学校の仕事とかけもちの同研活動は苦しい。でも、学校で子どもたちと向き合っているからこそ、研究

の内容と現場の課題意識と一致している。条件面のマイナスは内容面でプラスに。

七月三〇日と三十一日。準備を始めてから二か月半あまり。それぞれができることを実践したり、まとめたりしながら、六五〇人を超える参加者を迎えて今年も研究大会を開催することができた。

以下、二・三回研究大会の内容。初日の全体会は、朝日新聞社の松本宏樹さんの講演。「いじめ」に対する子どもたちの悩みや苦しみ、解決への願いの声を聞かせてもらう。子どもが生きいきと「いじめ」を生みにくい学校や地域づくりは、県同教が進めてきた開かれた学校づくりにあると確信する。

二日目の全体会は雨宮処凛さんと社納葉子さんの対談。若者たちをはじめ社会的弱者が生きづらくなっている今日の社会をどのように変えていくか、それは、まず、「自己責任」という言葉を疑ってみること、そして、けつして「あなたのせいではないんだよ」「人は、あなたも私もだれも大切なんだよ」という価値観をひろげることが大切だと思ふ。初日の午後と二日目の午前中は、参加者のニーズを大事に八つの分科会を設定。「基礎講座」「進路・就学支援」「中学校区事業」「人権・部落問題学習」「入門講座」「授業づくり」「保幼小連携」「子ども支援・子育て支援」と若い教師もベテラン教師も、そしてそれぞれが課題とし学びたいと思うような内容を準備する。参加者のニーズにあわせてからか、各分科会で、今日の子どもの人権課題や教育課題の克服をめざして熱い議論がなされる。主催者の狙いどおり。さてさて、今年も、全国同和教育研究協議会が結

成されて六〇年という大きな節目の年である。いま、子どもたちの状況が厳しくなっている。だからこそ、「差別の現実」に深く学ぶことを基調に据え、子どもたちの暮らしや思いを大事に、子どもたちとつながり、子ども側の側に寄り添い続けてきた同和教育・人権教育実践が必要だと感じる。市同教の研究活動が、北九州の地に人権教育の広がりや深まりにつながることを願いながら、私たちは、市同教運動をさらに進めていくつもりである。

(北九州市同和教育研究協議会事務局)

新刊紹介

(公社) 福岡県人権研究所 発行

『若松軍艦防波堤物語』 松尾敏史 作

『戦いの記憶を語り継ぐ』 松尾敏史 作

カラー三二頁 頒価八〇〇円

軍艦防波堤となって洞海湾に眠る三隻の駆逐艦の物語。第一次世界大戦で地中海に派遣され、商船護衛のため、ドイツのUボートと戦った「柳」。「大和特攻」に随伴し奇跡の生還を果たした「冬月」「涼月」。

戦争体験の継承と教材化のための学習資料です。お求めは研究所まで。



### 堺市船松（へのまつ）人権歴史館 の紹介

堺市船松人権歴史館館長 増田志津子

今回は、棋士阪田三吉の出身地、大阪府堺市にある船松人権歴史館を紹介いたします。

#### ■船松の歴史を学び人権の未来を考える

船松人権歴史館は、堺の被差別部落の歴史をとおり、部落問題を自分の問題として学び、「差別をなくそう」「自分は差別をしない」と決意していただくための拠点施設です。くらし・しごと・歴史・啓発のコーナーと阪田三吉記念室で構成されています。



阪田三吉記念室

#### ■くらし

同和対策事業が行われる前の船松の劣悪な住環境を再現するとともに、盆踊りや将棋に見られる独自の文化、共有浴場の運営など、厳しさの中でもたくましく生き抜いてきた人

びとのくらしを紹介いたします。



狭い路地「はんらく」(註)

#### ■しごと

当時の人びとの主なしごととして、靴なおりやと畜業、屑物行商などを紹介するとともに、人びとが不安定なしごとながら専門的な技術を磨き、社会に貢献してきたことを紹介いたします。

#### ■歴史（船松の歴史）

16世紀、ポルトガルの宣教師・フロイスが見た堺の被差別民の記述に始まり、同和対策事業総合計画の実施、そして現在へと続く船松の長く厳しい差別の歴史を紹介いたします。

#### ■船松の部落解放運動

1920年代にスポーツを当て、泉野利喜蔵を中心に盛り上がった部落解放運動の歴史を紹介します。また、運動を支えた人びとの活動についても紹介いたします。

#### ■啓発

同和問題を解決するための特別措置を定めた法律は、2002(平成14)年3月末で失効しました。法律がなくなったからといって同和問題が解決したわけではありません。

今なお結婚や就職などに関する差別事件や、近年では特にインターネット上での差別落書きによる人権侵害が行われています。このコーナーでは、パネルや情報検索装置をとおり差別の現状と人権の尊さについて学習します。

#### ■阪田三吉記念室

反骨の棋士阪田三吉は、1870(明治3)年6月3日、大鳥郡船松村(現堺区協和町)生まれました。師匠にはつかず実戦で鍛えられました。宿敵関根金次郎との名勝負は有名です。没後の1955(昭和30)年に功績が認められ、日本将棋連盟から名人位・王将位が追贈されました。記念室では、阪田三吉を映像『さんきい物語』や、ゆかりの品、記録写真などにより紹介し、業績を顕彰します。



名人 阪田三吉

当館では、館内見学と併せてフィールドワーク(地域見学)を行っています。

#### ■企画展

「船松の伝統料理〜食肉文化を支えた人びと〜」  
2012年10月1日(月)〜2013年9月28日(土)



明治の文明開化とともに肉食の習慣が広まりました。船松のと畜業は、古くから地域産業として発展し、2000(平成12)年3月に閉鎖されるまで、長い間、市民へ安全でおいしいお肉を供給してきました。

ムラ(被差別部落)には「さいぼし」、「あぶらかす」といった伝統的な食べ物があります。それらは牛や豚を解体する過程で生産される余り物を創意工夫してつくられたものです。保存がきいて高カロリー、重労働で働くムラの人びとに好まれました。

牛や豚の内臓(ホルモン)は、すでに戦前

からムラの人びとや朝鮮人のあいだで食されてきました。内臓は、戦後、焼肉から普及しましたが、以前は食べる人も少なくタダ同然で売買されていた時期もありました。今日、食肉は食卓に欠かせないものになっています。日本の食肉文化を支えてきたのはムラの人たちだと言っても過言ではありません。本展ではムラの食肉文化からその背景にあるさまざまな部落問題について考える機会としています。

#### ■来館のご案内

所在地 堺市堺区協和町2丁61番地1

堺市立人権ふれあいセンター7階

開館時間 9時〜17時15分

休館日 日曜日・祝休日・年末年始

入館料 無料

交通 南海高野線「堺東駅」(9番乗場)から

「旭ヶ丘北町」下車 西へ約600m

TEL 072-245-2536 Fax072-245-2535

ホームページ:

<http://www.city.sakai.lg.jp/fureai/index.html>

(註)「はんらく」

船松で言われている狭い路地のこと。狭いから傘を半分すばめないと歩けない。傘を半分すばめると楽に歩けるといふことからつけられた。

#### 追悼 伊豆丸鼎 顧問

伊豆丸鼎 部落史研究会前副会長、当福岡県人権研究所顧問が逝去された。享年八六。「虫の知らせ」「胸さわぎ」

が三月頃から時々あった。一九五〇年代からの同和教育史をまとめるとき、聞かなくてはならぬ人として時々電話していたが不在・入院中であった。伊豆丸氏と最初にお会いしたのは、氏が老岐小学校で教頭をしていた時、平川市同教会長と一緒にいたと思う。その後、福岡県人権・同和教育研究協議会事務局長、福岡市同和行政の重鎮であった。福岡部落史研究会では教育・啓発活動を、その後立ち上げた福岡県部落解放・人権研究所では所長として研究所を運営していただいた。

部落史研究会から福岡県人権研究所への最も厳しい時期に、身体を張って運営に関わっていただいた。伊豆丸氏の想い、実践力に私たちは学び、絶やすことなく福岡から部落解放・人間解放の炎を受け継いでいきたい。

(合掌)

理事長 森山 浩一

お知らせ

○ハートフルフェスタ福岡二〇一三

- ▽日時 十月六日(日)十一時～一六時三〇分
- ▽会場 福岡市役所西側ふれあい広場
- ▽研究所の展示内容 「全九州水平社創立九〇周年」

○筑前竹槍一揆ウォーク ③筑紫

- ▽日時 十月十三日(日)十時～
- ▽会場 筑紫野市京町隣保館(予定)
- ▽参加費 一五〇〇円(会員一二〇〇円)

○人権啓発担当者をつどい

- 第一回 十月二十四日(木)一四時～
- ▽会場 福岡市中央市民センター視聴覚室
- ▽講師 谷口研二さん(公社福岡県人権研究所)
- 第二回 二月二十八日(金)一八時三〇分～
- ▽会場 ウェル戸畑多目的ホール
- ▽講師 平沢安政さん(大阪大学)

○史実と授業・啓発の結合をめざして

- ▽日時 十一月二日(土)一四時～(予定)
- ▽会場 北九州市内(予定)

○国内人権ツアー「歴史が語る海の道」

- ▽日時・集合場所 十一月九日(土) 七時三〇分小倉駅 八時一五分博多駅
- ▽訪問地 平戸オランダ商館、鄭成功記念館他

研/究/所/日/誌/か/ら

(2013.6.21 ~ 8.20)

- 6月
- 22(土) 教育部会(ココロンセンター) 啓発部会(田川地区人権センター)
- 24(月) 事務局会
- 25(火) 機関誌『リベラシオン』No.150 発行
- 27(木) 第29回松本・井元研究会(研究所)
- 30(日) 『全九州水平社創立90周年記念誌』(第2刷) 発行
- 7月
- 01(月) 事務局会
- 08(月) 事務局会
- 11(木) 大阪同和・人権問題企業連絡会第2グループフィールドワーク
- 19(金) 第30回松本・井元研究会(研究所)
- 21(日) 執行理事会(クローバープラザ)
- 25(木) 第11回筑前竹槍一揆ウォーク打合せ(太宰府市、筑紫野市)
- 26(金) 第32回九州地区部落解放史研究集会①(日田市)
- 27(土) 第32回九州地区部落解放史研究集会② 教育部会(ココロンセンター)
- 29(月) 事務局会
- 8月
- 01(木) 『若松軍艦防波堤物語』発行
- 02(金) 編集委員会
- 05(月) 事務局会
- 10(土) 部落史講座(福岡県部落解放センター)
- 16(金) 第31回松本・井元研究会(研究所)
- 17(土) 外国人部会(兼海外人権スタディツアー) 事前説明会(ココロンセンター)

(※住民意識調査等の受託事業に関する調整・事務、研究・研修や教育・啓発に関する相談等の業務については省略しています。)